

8月31日と聞くと、遠い小学生時代の記憶がよみがえります。夏休みが終わることの名残惜しさと、早く学校が始まってほしいようなもどかしさと、その境目でした。新たな季節に、神様の御業が働くことを祈り、御心を思い巡らしてみましよう。

心を開かれて

8年越しのルカによる福音書の最後の場面は、私たちの思いをはるかに超えてかなえてくださる、神様の奇跡の輝きに満ちています。死刑判決も、弟子たちの裏切りも、十字架の苦しみも、すべてなされてしまい、絶望の結末しか残されていない状況にも関わらず、主イエスは復活し、弟子たちにあらわれ、共に食事をなさいました。

父なる神の偉大な業には、手遅れはないということを、ニコデモの箇所学びました。真心を示すにも手遅れはないことも。裏を返せば、私たちは神の奇跡を信じられない、不信仰な存在であり、勇気を出して善を行うより、言い訳をして、状況に流されることの多いものであるとも言えるかもしれません。人生を歩む中で、死人が復活することはありませんし、正義が踏みにじられることも、繰り返し経験するからです。

聖書が、他の歴史書と大きく異なる特徴は、神話ではなく事実として、主イエスの復活を最後に証言していることです。この奇跡は、あまりにも非常識で、私たちの常識からかけ離れています。この信仰を得るためには、人間の理性だけでは、無理です。目の前にイエス様が現れた弟子たちですら「なぜ、うろたえているのか、どうして心に疑いを起こすのか」と言われる有様でした。45節に、イエス様が、弟子たちの、心の目を開かれたと、記されています。神様の方から、働きかけてくださって初めて、この復活という奇跡は、人間に感動と喜びをもたらしたのです。

確かに、私たちは実際に体験して初めて、この世界に、こんな素晴らしいことがあるのか、と知ることがあります。大自然に身を置くと、自分の小ささと世界の美しさを知ります。温かい人のぬくもりに出会う時、大切なことは何かを知ります。復活の主を見出すとき、この世を支配する本当の力を信じることができるようになるのです。

使命に生きる力

「よくインドまで行かれましたね」と、中四国聖会でも声をかけていただきました。9年間もドイツで宣教された佐々木先生、家族でフィリピン宣教に励まれる小川先生という先輩を前に、誇れることは何もありません。

しかし、改めて世界の果ては、この日本であり、福音を届けるべきなのは隣びとなのだということを思います。愛する人、大切な人にこそ、私たちはキリストの証人として、この福音の喜びを届ける使命があるのです。私たちは、復活にあずかる、天国の力に覆われると、約束されています。ルカの終わりは、使徒言行録の始まりです。私たちにとっても、使命に生きる日々の始まりです。この聖霊の力を求めて、祈り続けましよう。